



新編女水滸傳

三之卷

~ 13
3561
3



門へ13
號 3561
卷 3

新篇女水滸傳卷之三

浪速 好花堂主人野亭著

第五回
賊婦斬賊誘小女御草山
勇士奮勇救舊主飽多河



善と審め悪を懲りて禍災を未萌小防を邦國と香山乃安ん
置八社稷良臣十支業かき故小の故國の香里木右の詔よゆに世臣有
の謂くも話故葉竹山重忠の弟て頼朝義經の不和を歎き潜小梶
原が動作と不審又木枯が支跡を怪しむ折帝依々木義清一付出来
アそれぞ重忠幸ひけ良も智慧をみしむ木枯を逐ふ梶原之聲
とめしを重忠慮有とつて木枯は漏る隠謀ゆを平三が偏執と

女水滸傳卷之三

昭和 34.6.3 蔵書

業は巧言令色とて渠を惑へし義経を追失せ猶も諸將と残害
 せし巧くは重忠が討らゆ少く権原の許と逐出させ女計り子途
 不成も重忠を深く恨み此六の上徳の忠光小回逢平氏の残黨を集
 謀るの塵揚せんと膽牙も思ふ西國小平氏の旧臣多りきささく鎌
 倉と追せしより遠く西國小志津国三州山迄たどりて俄小大白雨
 しく車軸を流し如くなき山中地獄堂小馳入扉と閉り雨と
 のに不思二場乃後と結る稍有風と眼と注け外れ方小何人の
 聲有扉の透回より宛見をば日早暮と月より出ると月影小
 透し見ると雲尖如き二個の大漢十三四許の乙女と差接し曰や小妾
 な強頭小婢汝龍耳小何と云ふ道路も如く我々圍の死と致
 十分樂し後室の津小佑渡過かば草花とさびるたれあとも



無情罵きし乙女唯泣小啼き苦し不為し二個を大なる悪發取詮
 首肯いせし千足を縛り樂しむると己帯を解り背年いし
 穢魯と多せ扱言らる我先樂を人同汝に通とせよと既小狼藉
 小及今も此一個の漢先小男を引退り曰汝何ぞ非禮か我し乙女
 と先見附しなれ我先慰むる苦なき汝我余を喰と乙女引
 立行今も先の漢大に怨り女う西親を逃せ我功か我し先と
 引戻し互の悪及後争く果小刀と抜合し上段下段切結ふ乙女声をも
 不待三日後自はく居き木枯くと見清し善得物も獨笑
 しほ堂をさ出く明晃々た刀と抜一個の賊も肩尖ると左加衣被り
 斬附をば忽ち西の成り死ると木枯り血押拭し早く乙女か
 縛と解如何成者ぞ尋ぬる小乙女泣き音らる妻の遠江池田の宿小

茂三申者の娘とくく西國領拜の力又母の誘を處々を回る侍り
 して今日此山来る道少く驟雨降出し又母と共の走り侍り不圖
 又母と見失ひ尋迷ふ事此二個の男出来りと又母に逢せんと透し拵
 此山連来つ侍り侍り涙と俱小諾なき木枯の背を梅さくやと
 痛みの支共が折る妻の身附し佛菩薩の引達し玉ふり
 又母の午に渡り延の何者が来り共些ル身に難義とや然り安
 小長居を前の西漢乃同類なり来り又如何なる事か目見やん
 不知先々我知己の方侍り詞巧く云慰めし女を午と推し山あり
 速々下り且祝國清治が親茂三權ハ西國領拜と思き弟ハ宗善清次
 何れも尋人妹女若萩と侍り諸公と拜回し不計娘と見失ひ夫婦
 何れ風の如く尋迷ふ此山を尋り此路丈の諺を耳山中を娘と若萩と見

失子と叫びて堂の前小侍立り此月夜の影小風と二個の屍を見附ち
 駭き勿り正重辰の如く内西の方より多く人御音あり連坐り成
 堂の後小遠隱を息と諺候見よ一個の山僧先小五軍棍使後より
 従り出来らぬ皆魁頭長く大眼さし大刀帯有る弁とさげ有る不
 山豪の徒るんと孫懼り耐姥身と縮ち猶窺居り渠山僧堂前の
 石小腰打けり兩個の屍を小賊の炬火あくと見や天平右此奴は登五庫道
 とも又右と遣せし中賊か如何と寂滅せり向ふ一個の漢は此二人
 兵庫より此歸路小一人し女と誘口と同徒の語を聞侍り此不
 たる如何なる議少や不存り山僧の曰平生渠等情欲小恥向と聞か
 果しく二命を失ひ能ざる屍を見り穢らるる漢の腹を
 肥せし指揮もまば小賊共畏り兩個の屍をかる攬り谷間倒と歩



木枯山中
斬二賊

せむと茂三等の八消も入度程恐ろしき事ごとし女と誘ひて定ちて若狭が
 夏なふくし杉も山僧が躰を定規の音声面部夜中ながし平く侍従の息の
 宗若かれを太きに駭き保居るうち剛慶天平方に向ひ汝ハ小賊と云ふ
 林麻の御ふく富原家ゆゑを押し黄白を掠取り若好得物なきを
 官道不出く旅客と云ひて我れ跡より行なきて早速々々急ぎ
 天平太き畏れ山を下りて去ぬ跡ハ別度唯一個何う熟思ふ首と云
 沉吟する後より茂之夫婦声けり珠くは宗若君より別度お發せり
 何者申く是を見れば遠江あり別き一宗我乳母の權を剛慶
 深く不審卿為何の故有る此所か有るやと問ふ茂三云く曰は身得
 ちのひく羽黒小登ると云ひ後見清次も親を捨国と出がま後耗息
 なるに或人の語らまは清次は佐々木家不並侍一夫暗の武士おわたり

聞し故喜し何の喻も有る今年湯谷君侍従君の回忌中も當りぬを
 娘と侍の親子と人西國順泰し公及清次も尋會へ志し所々拜買
 近は安否を聞き清次は先の年極危の罪を犯し主君に致す
 此の荒蕪の方下りしと不可施なり此四返面多く播瓦の礼所と拜
 道と急ぐ内小娘若花を見失ひし山中に連下り聞し母逢ふ事
 未だ身逢逢ふ事歎の中は怪なり強盜の首魁も成りし如何成
 天魔の所為かとも聞ふ有る時人の噂ハ池田の名侍従が息ハ剛慶し
 行徳勝す新小角と聞度その我嬉しき事か街道冠の歌を聞し
 侍従君が種もいと寂尊く思ひに人を殺し財を奪ふ悪行を恐し
 りと聞は娘も和若小賊の私語も知るぬ更いけし所在を知らし
 善意不飯もいと程女請共涙を流し諫めぬ若剛慶馬耳風

手を臧獲し面會て欠を誘出しきりつて賊多し働を見物せんと
 突起り行々をなする六引る新許夫婦が辭を以て縛るに思ふに
 不敵や身々し紅衣をまき搥子以て手と掛引居る戒珠を以て切敵くた
 剛慶大の眼を見開き言謂汝諫言聞捨置を呼岸なり我何と山賊の
 所行をなさん辱けなむも宗盛が落胤左祖と集て源氏を倒し二度平氏の
 盛を見今諸邦を回し英士を招き貪欲の士民多し黄白を奪ふも戦乃
 用財なき口無善人賤人の常萬泉の土産小言聞くとさるる早戒を
 果すと抜く肩峯も胸骨もく破る一聲叫ぶ息絶たす乳母ハ
 辺り行も山刀捨ひると我胸元ふくも突立是は浅儀の悪漢よ毒夫婦ハ
 外小の不知種姓を誰不聞とつて井平家呼ぶ當時鎌倉殿の戦ハ山賊野
 比栗の集る勢も拒敵せんと愚かるる平家十萬の猛軍も西海の二戦ハ

ち少程の運け未宇佐八幡の神託はる何と聞かぬ及ばぬ罪と造らんを
 堅固不終驗道修行し亡門の後世を吊く後羅の苦胆を救ひも言信
 勝り孝美良なる和君三才の秘もも乳を奉りて妻を申未朗け頼ん
 叶五の鮮血草葉を深紅涙袖袂を漬り苦痛の忠諫も勇六天の魔將軍
 ばるも衣と見るがたも交かす剛慶の空嘯も大義の心をも老婢か如語
 圓も中々穢らりと戒刀を執卓 權ら細首撃落し去るは鮮血押拭ひ修々
 上下れも行ぬ却徒因清次依々木家放逐を得く道芝が雷縁
 何も此些小中任ひせが道芝九子産す小附ても再度主を以て奉せん
 思ふ折る而故主義清罪囚を失し罪も仍も國を放逐せりもと聞くと大に
 打駭る何卒尋遇希せり力と副内奉を身代謝もせんもと道芝
 と家小残し都の方を登らん道芝急るる今日暴雨小宿を投後を月夜を歩し

三草山と越人足早小来りてかと思ふが所はなほなほして何カ人登
 見ても二個の尻有不審思ひ月影も所見して何中人見覺し
 如し急ぎ指鎖具出出用意の提燈小火を点し能く見ると是如何の
 幼女も別をし又云ふが所今一個を見も母權女を何故小来
 来り何者一切言せやと金共言ふ所果暫時茫然と居るに
 如此に没了期と耳小奇呼生きと呼吸絶て程経れども言ふ謂
 唯颯々たる松風寒小響音は湯々たる水声は小鳴るをわが清治のたの敷
 身不孝女子又母を捨て他邦小名を合身と云ふ又慈女の不良死をうら
 痛哭小時を移すが今敷無益哀がれを涙を揮揮と尻を埋葬せし
 心小切き摠子と一管の小笛有揮るをその所見是又母の所持き物
 かの敵のえをりたりと懐中し路辺の土を捨分て二個の尻を埋り印の石を

建置は山下の此辺と後世乳母の墓所といひを何の程か言て
 姥が懐とて地名の二はと成る却續前話依々木義清は住則近江を
 放逐れ櫻女を聖平ひく歩不則旅途よまひるが後内左衛門の教下
 如く清涼園と達て高議せん西國を志し歩むが桜女とて娼樓小
 生長弱女をを草鞋小足と破ら道たりと日と重く堪ぬ所川
 四もまゝりも義清接女小語るも此所に往昔業平の朝臣二條の后
 とてひま何とて詠を所今又身と我草野は零替り成
 通る夏も詔り行先官道の昇夫と見ると一個は海松の如く粗衣
 と着し今一個は裸小垢條禪と云ふ二十詩の錢とて通る禪よとて
 つつ酒小酔一挺の盞子と擔け浪々として高き一歩は低く出来しが
 義清接女と見ると声をうけは何処の驛の尻を盞子に侍り奉規の尊圓の

是を痛めし神人價論^して、余の^しを^しと^し古^く吐息濁酒の臭い
 甚し義清右流左久思ひ^しる^る否^の僕^の肩輿^なら^ば不好^の余^の旅^客を
 昇^りて^は櫻^が千^と推^して^は行^過ん^には^は丈夫^神を^て丈^人好^む玉^りの^も
 内^人棄^てし^て思^ひま^りふ^た不^振る^る余^の些^の見^の酒^錢を^も支^はな^らず^に袖^を
 不^解る^るを^煩累^にし^て突^放す^る小^踏を^も轉^びたり^一人^の漢^眼と^瞋り
 不^棄て^しる^る追^ぎ何^ぞ打^擲す^るや^と茶^を以^て義^清の^面を^下と^拍義^清
 性^急の^鼻を^共婦^女と^擊たり^て夏^たぬ^を毎^念と^堪ひ^頭と^低小^子過^る
 廉^忽せ^る乎^を免^れの^を謝^はる^る急^に走^らん^に此^時倒^れ漢^起ぬ^る
 義^清の^唇を^はく^て曰^はは^し治^郎め^を痛^めな^が廉^忽と^而已^して^清
 今^彼起^の石^少腰^と擊^痛難^堪し^引倒^れん^に義^清心^怒を^振解^ん
 是^の内^き人^の棍^柱息^杖を^振上^義清^の額^を嘯^と擊^に額^破る^る鮮^血流^る

出^りて^は義^清奮^然と^怒り^て殺^し既^に刀^を下^にと^りて^は格^女急^に押^止聲^曇
 理^を諫^むふ^が義^清刀^を振^り中^に憾^涙少^るを^居る^所斬^る程^不追^ぐ
 所^の亮^才徒^出来^ず擊^つ敵^を却^けり^て兩^人苦^難の^を知^る國^の清^は猛^虎
 都^下今^も此^處未^だ此^光景^を見^る走^り入^る惡^漢を^投散^す支^風
 木^葉を^飛ぶ^が如^く惡^漢大^なに^駭き^て竹^杖を^打振^り清^治を^目が^け
 較^する^る向^猛虎^は支^共せ^ば死^鳥の^如く^駭甲^を或^踏倒^し踏^のり^程惡^漢
 震^る鬼^を八^方へ^散る^る義^清の^虎を^免る^る禮^謝せ^り此^人を^見る^不し^も
 是^國の^清次^を行^不斜^に清^次を^思ひ^がき^面會^を奇^に稱^す女^一紀
 物^語追^て申^承す^る此^處不^傳留^せ惡^漢を^支當^を布^り合^さん^に
 不^圖義^清格^女を^伴ひ^此所^を去^去稍^程漏^る一^箇の^歌店^を入^絶る^る

再會に其の妻夏と悦む叔義清彼罪因を失せ夏跡を詰り清次を遠避
 と悔み只管に頼り身を清次公と許諾且己も道中にて両親の横死の事
 まで詰り落涙しれ義清様も心中を推し傳ふ袖を濡し清次公と
 厲きて白今悔く無益夏先夫の賊を尋出再入鎌倉殿の周下を連入
 して喫駈かき且先花此多下り討策を廻らせんと二人を伴ひ荒紫取
 に附搭して西国ふしやも且祝芳野川浅瀬もた行水の度分と云ふ
 事なき又佛経の中外面似善薩内公如夜又と説ふゆゆ木枯は着秋を誑騙
 言葉で巧く播衣室小誘行春雨が亭へ行く畧賣人又と云り春雨も
 若秋が容色非常と見領小救救の金不買えり若秋此家と木枯が知己の
 家なると思ひ小姑の娼家なる夏を知り只後況に居たりと春雨余の婢女
 小可し種々透痛もせり木枯も行衛定ぬ旅途をせ此家小三四日

滞りし西國方々動静などを探し聞ぬ春雨も木枯鎌倉の事内木枯
 に倚彼地の息耗と文となく尋問の中思ひより此女は猶客を其妻と
 する者なるを頗る伶俐の生きたるに彼もなきを女姓とく不深く思惟
 外なる以郷養應は是を留まらる一日秀蘭夕虹の雨女春雨の方より
 り分る春雨自に詰りて夏と問ふ初秀蘭は白昨日鎌倉方より女の
 誘ひ未分ると鎌倉の地形動静を委しく知ると一役小可用者と思ひ言語を
 餌小取並たりと話して秀蘭夕虹一面會せんとて春雨手鳴りて婢を招き
 木枯を誘ひ木枯出まき座小着會釋しりて見ゆ羊色絶代貴人七別
 房と云も取しぬ各儀かきば秀蘭夕虹も涙り心中に賞嘆々々秀蘭
 熟視く若君が生国に都より無之年と向木枯然とて秀蘭又都より
 出文の家姓を承えんと推問する木枯亦面とて父母の名を告げし者小侍と



清治三拳
 擊段内

詰りし言面小侍を枉く免さるる辭也と秀蘭強く押回るるを八咫の辺
 りの者なりとそと秀蘭曰若くは縫平の王の息女なりと云ふ小本枯
 駭然ともし知召支哉君ハ何人なりと云ふ秀蘭起り木枯を坐頭と云ふ
 并々云らるる女ハ陸陽の頭清足が娘と云ふ二位の禪尼ハ李の按察局
 と申知盛卿の愛情と云ふ者小侍の思ひ出せし禪尼と云ふ清
 小君の身の先年重盛と産後後子任る清盛と此度も又男子と云
 産しと眞故佛神小願を乞何乎弄璋と産せ玉と祈り小生産子ハ
 弄丸之清盛卿ハ強氣の生質故女見し聞玉如何許之腹再らるる苦
 上総の忠清の命同日出産の男子と尋さる八咫の辺に不縫平の妻
 男子と産しと聞忠清を見ざる替来るぬ今の宗盛則是乎と相と云縫
 種故重盛知盛も不似付暗弱なる社跡増を文小跡し我娘如何成し

定腹見ふ思出せし包隠せし秘支り小今更言出る様もいと道
 へ流しし物詰りの衷痛り何乎尋の参りし男内壽永の乱起て
 八咫小止む手と云ふ都下有と雖も病小少く居りしか後快氣と云
 死者女何方共なく行去し其の妻は是れ也此年迄御仍衛を不知
 小天良縁を假し去不討今逢参りし何れか面部禪尼似手
 故叔を推量ししせめて悦び勇む道故夕虹春雨も木枯を拜し感悦的
 不斜木枯も竹喜限なく叔曰く毒も人道殿の娘なら其知侍と云ふ母
 末期の物語小初と云聞侍何卒義経昆弟討りし門の修羅を故公
 弾的も成り義経小親近人なる渠の禪尼の娘許女の色香小初と
 小多はも暇を得るに梶原平藏妻を悦び妻に入る渠ハ義経と

不快の者なきは是を幸小梶原も喜しなり種々義経を後ざりて終
 奥忍追退けや熱腸も多し猶範頼始和田兼光竹山とて残害し
 頼朝の權勢も薄らぐ後梶原も謀反を勸り頼朝を討せ其虚不
 成りて梶原も討平氏の遐思を尋出し再度平家の代りなり是
 膽を嘗し不永福寺供養の帝上総忠光膚となり梶原が平小頼ら
 如何やくも採令男折弟一夜風雨勵しを幸ひ管字計者小酒と
 醜眩を見らるし控行の鎖も用忠走を走らせし須股も平忠光が
 跡も暮ひ鍵繩も引倒れし女弟も戸隙より窺居たりしが
 此時見く矢を放ち軍平を射く無難忠光を逸亡し此更を誰
 漏り久依木義清囚人を奪へり帝重忠此義を言出し我清も喜
 同罪も放逐け仍も残黨も集り禰上は西園ふ所なる然も不斗

自身違ひ面會き又偏小祖先の引合し玉かめと語りて皆々も看
 を感じりるが秀蘭大息し言り惜哉忠光急過く膚となり不斗身
 中も梶原が秘小有り討策を施し妻号又外子有る群黨を催し内外
 螺し合し攻ぶるも頼朝が頭を破り妻号も不斗是時運の不熟
 なるも智勇の義経を退け去り今も君のあすより出する姓算り
 味多ぬ不莫大功を此上山寨中供し大将幸盛君不對面を赤く
 又も喜も止る春雨不別を古山寨へも赴り

第六回

圖書悦櫻女壯士殺下吏
 監物省道芝蒔婦逢良人

詰設同の情次不斗義清夫婦不斗逢り龍雲不斗存いゆ道芝引合し

るれど道芝も深くはば早清次が西親の不良を聞きて松波袖を濡しから
 従是義経櫻女は清治が許ひ有る産業を助事時々芦葉をうが行方ぞぞ
 素りる道芝ハ男児を産む名を清右郎と呼て今年三歳お成く稚愛盛
 かりば清治夫妻調点及只半中其美玉の如し櫻女も朝夕お抱えお愛
 りんば清右郎海へ剛睦伯母姑く親て桜女を慕ふ又所生の妙りかを
 時節秘おさるる村落の祀禮賑く就中太宰府の祀近國の人々迄も
 足を運ぶ程都方より種々の商客下りり市とらひて余田樂放すの
 徒此処を集る香客の目と物りり多は稠人蟻の群ゆが如し道芝も以の
 清大寺を背お戻桜女と誘う赤結しるる太宰小貳の寺子小石根圖書
 かくお依邪悪の者ゆて民の定集も賄賂を貪り非義の行状多く
 諸人吐唾しく憎む雖も渠が權威お懼を誰責る者ぞとけりか

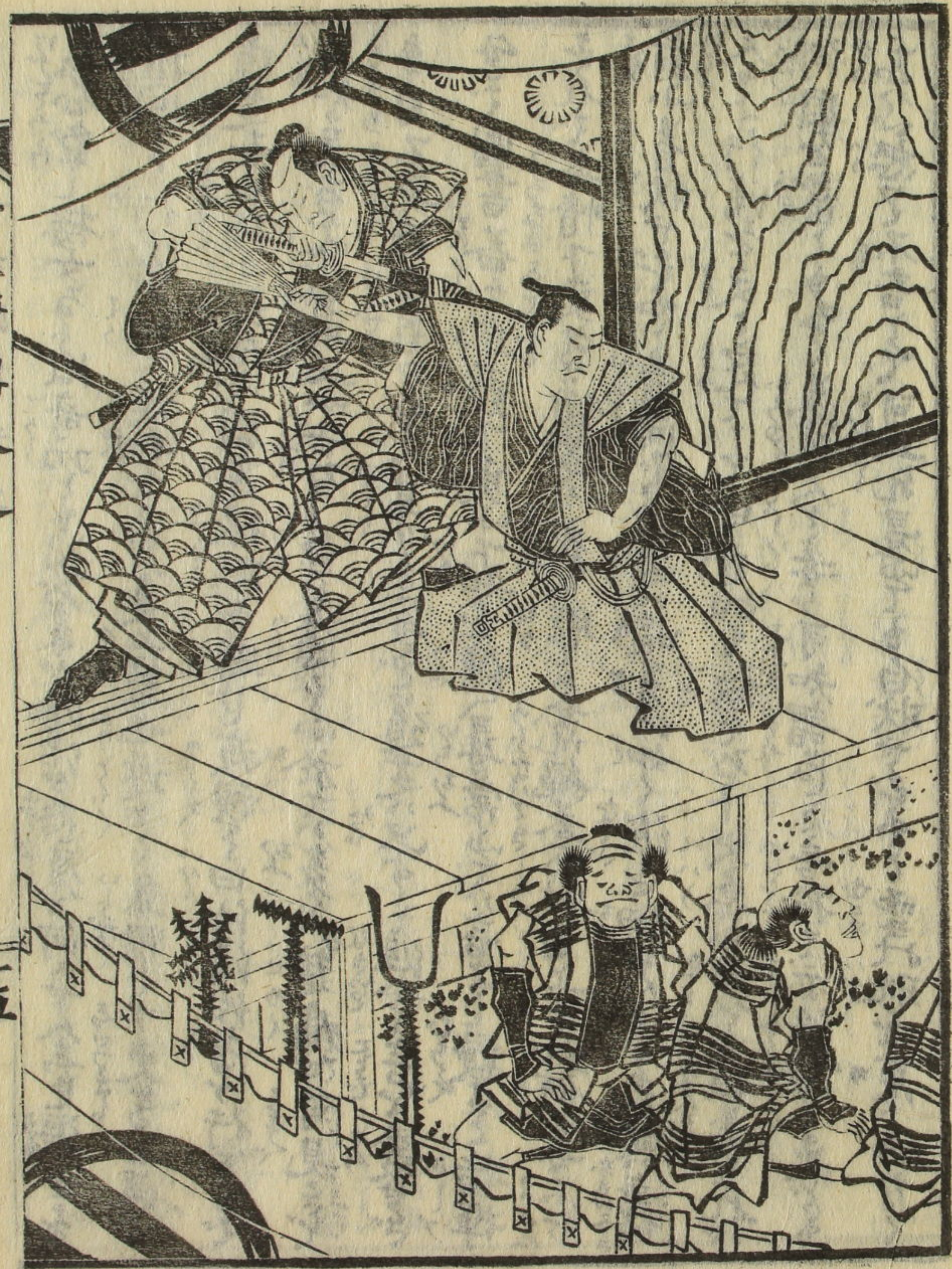
今日賽禮小詣へ従奉り五人をねり華表道を通らんて今を警る味
 るる人皆乳虎毒蛇乃思ひをかり道を用き避る故桜女道芝も傍小
 るると通るも待居し圖書風と桜女を見魂天外小飛空蟬の如く
 驚く見とましくいお跟随を呼く何う耳言其身本殿の多歩を行
 道芝桜女何の心も不着下向の道かを清右郎を透し慰る我家
 居おゆぬ圖書が何當か見隠小付慕くくと見定まはゆくと
 復命し圖書大らお怪い尚今も桜女も身止し面合しむる小上方の者ぞ
 今も夫婦共清治が方の食客かかるとい夏かきを清治が貧困を幸と奴を
 云合りて桜女を奉る小差出しなむ許々の賜金と云は清治も所由
 とかさんて云遺しりきを清治お中怒ると雖も地主もいりてお曲の圖書
 かりば是く返言してお怒るもなんと思惟し辞を低しく種々と言ゆりて

返しくるふ圖書ハ情欲頻つふ萌し接せ々々容色と不忘了得哉川段内と
 不レ侍巧ある者に箇様々々討らし命じ々段内唯諾し清治がる
 以レ行呼門々自據中位清治小向ハ言々々々先達て縣令汝方接女
 と奉公致をもも仰付らせし汝が軍の大幸に早速許諾す處
 其義なく辞退中段甚無禮や除他の縣令乃ハ福詭と忽
 禍成ぬ我阿主の寛仁の君子なれ是を罪せん今日我と々
 利害を後む汝稱す不取速不許諾や然時許多の賞金を
 賜ハ雙刀免許有汝も武士と成立又蒙に耶や寂北大ふ々れハ
 清治程も怒氣と堪く縣令の仁惠感謝不堪早速領掌す汝
 其共渠小夫もいれん其強も中難是非此件ハ饒怒願すも
 其内帝と見合と々中圓せん奉公不差工ハ時帝もいん

縣令ハ愚甚王の中言者玉の々々々段内眼瞞じ匹夫何ぞ
 多言を始り權を以て云渡しても苦しう細支を格別の仁心と
 言葉初ハ小再四の使者と差越し玉を奉し思ひて提孩
 と透と如き言條と多罪なれ此六有無を不論引去海らび嚙脂
 かなと懼しる此時清治怒氣大に發す材也不得據聲を延
 て段内を引ける々々々呼く曰凡輩何ぞ如此非礼か々々人ハ事々々
 者と買えん言と無道や不於權を以て奪ひ去る以て奪り字田
 天子ハ苗孫依々木家の貴女と圖書如き田舎人の弄物小おいなか
 些子細有る處所小住しるを責めた兒を野岸りた我意の條々
 一々々と嚙思可知と鉄棍の如き又手を以て面を擊ち去る又是未だも
 金剛カ小智を何らたらんぞ々々々眼突出一聲呼ぶ息絶すと

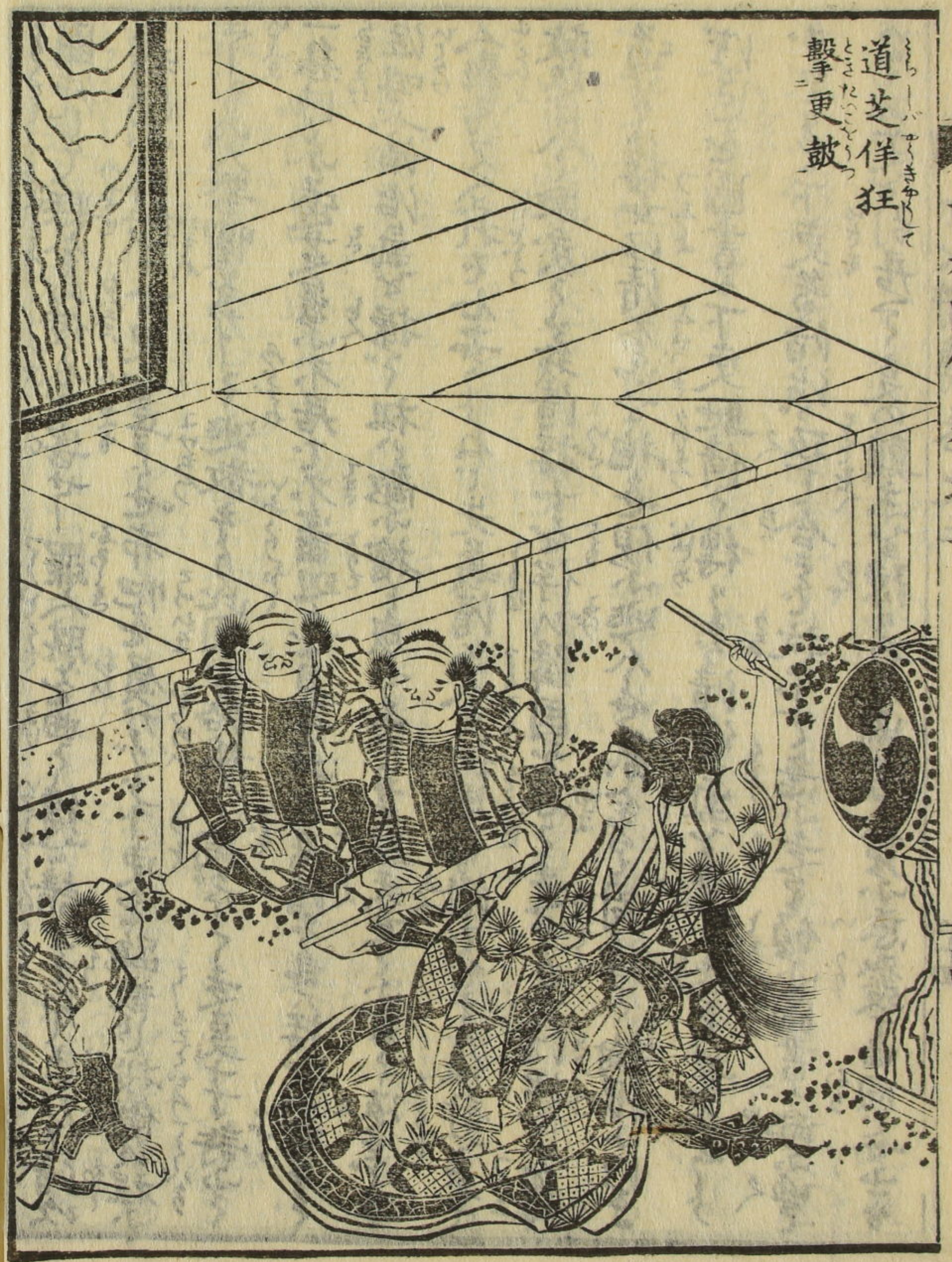
義清接女道芝も此物音小致る尺勸解へし出来り多小早呼吸絶れ
 を大不狼狽如何せん途方なくまきまき清治も先なる追ふ不思
 不存外の支かきも頭を掻今悔も返らぬがま邪曲の墨書な
 らむも此後止まらざるも不如早く此所を去去人なく義清も
 是不同し此の故衣帯と布疋小包も清治是と背負道芝も清治と抱
 を義清ハ接女が手と推考用しく家と捨鳥夜小紛せし逃避りも
 圖書ハ晩景追段内か不歸と訝り人を遣し見せむ家内小入ル
 唯段内のも眼亮出せ先居をせかた小致驚も馳ゆも圖書小
 報に宿根大も不怒り群吏小命し急以公方ハ半配しく清治も速し
 む叔清治ハ四個を提挈く中國を去り走ゆも雖共婦女子と連たは
 道不速氣を焦し進む所ハ圖書が下吏千人許早も追分く公方と

團繞り縣令の使人を害せ罪人脈を曲く縛り請よひめたる清次
 義清小同部女児を守りせ布疋を肩がが下吏を蹴散り投倒し程小
 ぐもの大勢懼をかりて逃散り此間ハ落延今閑がく走吏十許少く
 一息はふ道芝も不居む不審辺りを見せ共不居清治も接女小抱せり
 佐呼も清治氣を操り初ハ敵小擒り成るも韋駟天走り小返せり早
 人影もるふれを心安うりね先義清兩人を何國ハ潜むを後討り定て
 救返りも馳疾く義清接女を伴ひ降國を志り走るも清治も接女
 道芝も接女は清治と抱せ俱小逃んが余り周樟も樹根小はま
 げを圖書下下吏馳倚り縛りも清治ハ氣を急せ走り是を去り
 下吏も下下吏も清治が返り合を抗り急小走り頼小圖書下邸小ゆり
 下下吏を引居り支の顛末を陳れも圖書大不惡致て白同じ女出も



大正時代

五



道芝伴狂
撃更鼓

大正時代

七

孤公ひらこう擊うしら櫻う女にらんばは奇き切きもいかがきが清きよ治ぢが内房なるまを何各おの人ひととも渠みち女を
 推お回まわして行ゆ方かたを吐せし追お兵へいをひ人ひと更さら上あ策さく也なり速すみ々々焦こ燥さうを下吏しを乞得とく
 道みち芝しばを白破はくふ引居い居い圖ず書しよ猿ざる眼まなこを瞶じ疾視しく曰汝お清きよ治ぢが行方かたを乞
 不知し者もの下くだ真ま正せい告こる白隠かくる不於お多おほ々々楚せ痛いた可ま見まる也
 幸さい目め不な見ま肉にく白はく首くびを乞罵ののすと道みち芝しば六む品しんすと迄いた今いま言ことを發せざん
 乞こせて圖ず書しよ益えきを乞惡い敷し下くだ吏し下くだ知ちを傳へ尋常じょう少すく言ことを指揮し
 之これを無情むじやう下くだ吏し道みち芝しば衣いを脱し荒繩わづらひ卷まの杖を乞如い何い女を不なち
 前まへ不な着ち狀じやうせざん責負せき回わいを道芝しば唯ただ後ごの如く涙を押すチ々々是これ無情
 人ひと々々行ゆ儀ぎを定て白首くび的てきも致さざん火急い小こ發はつし難義がたを乞れが
 何なに國くにを當ももなく落れ人々々事ことが可知し謂いはし言こと捨すて亦返かへ入いを下吏しも
 乞こせて怒いかり不言ことを可止とは是也なりも白狀じやうせざん亦其また肌はだを荒けけかく

杖つゑを乞て丁と較すていいふと叫こゑびく若わかくも白はく首くびせざん又振ふりて回まわりて乞
 擊う牛うし頭あたま馬うま頭あたまが呵責を杖つゑ何いか可保たもと肉破ひ骨ほね碎くだけ鮮血あま混ま々といひき
 出い来き見まぬもいふ有あ様さま也なり道みち芝しば弱よわく身小こ杖つゑ十じゆ鞭むちの杖を受忽いきなりち一聲こゑを乞
 乞こせて氣き絶たしたと圖ず書しよ公こう急いふ藥湯ゆを飲し女抱かかりせるもば衛息ゑいき吹ふ返かへし
 りれも今も乞絶た入いらんが乞醉たいなれも今宵よ八はち拷ごう回わいを乞めめ々々獄ごく下くだりて
 嚴げん敷し看かん監かんを附置おきて却かへ視み圖ずの清治ぢ道みち芝しばを敵小こ擗つき心安やすくいふ
 博はく多たの辺に乞ふ些れ知己おのれの乞を乞責せ清きよ梅うめ女を即すなはち託置たくしを身假かり影かげ鼻
 假かり冒ぼうに相負あを變垂た下くだ打う被ひく賣錫う箱ばうと姿を扮し宰府さいふの街を裝面
 し假声かりこゑ小こ歌うたを唱専せんら道芝しばが身の安否やすを乞規きら心庭にわど衣が乞道みち芝しば
 圖ず書しよ手てに擗らせ推お按おに逢し後心こゝろ乱みだれ或時とき高たかく叫び我兒わがこ良よ全
 と托ひ思ひ又或とき時とき呵わ々と笑わらひ宰府さいふの山月みやづきを見る阿房あふ鳥とりも乞出い

ぬ我も月小くも人此半用よとまて四で都く正氣不有む圖書も無詮方
 其俣小打捨置まると斯く言ハ益々邪曲多きを此月よと松原監物
 と言ゆ武丈を圖書が同僚とて大宰の事或よと指越え番小と受を
 聞しむ此監物の圖書と天地而泥の相違少く篤実真正の士やをばら
 大旱小雨を得たる心地し監物々當直の事小遇をるとする一時り
 監物當直の事而囚人小分陰小尋ぬる子細有とて自獄の辺り小至
 お小凡と道芝り狂乱の乱語を聞て管官牢に子細を問む未しく始末を
 演古く監物眉小皺を掌て圖書が非道を憎と嘆息し夜牢の戸
 を開く如何小女決是へ出まると云も道芝頰を掉又呼出しく不知夫子の
 行方と問呵責の鞭をふるんと鳴る腹や偕老と契為替し良令兒
 其憂卧も不知火の花此乃果小身を縛るを如此政治の道暗と思り

圖の穿れ表出まると狂卧監物使小思ひて曰汝が怨理の事
 小清治の行方と不知を牢宿を宿放つ疾出く此大鼓を撃ちて聞て
 道芝ごとく起傳へ聞聖人の御代小政道小私なきも若下吏の裁判よ
 非道の事や有なくと城外小鼓をけ討有者小撃せとや夫ハ本をひ
 の例是ハ無罪身と責ふ呵責れ鼓徹らししどく此世の思ひ出小撃手破りて
 腹んく牢を馳出撥追え撃や現の狂乱心と氣力の疲をけ一撥撃きて
 いらり卧又起ちと撃手殺めとの報ハ聴まじと夫や我子の聞よか五の報ハ
 迫り朝露命の存申し四の報ハ西苦海波の報と音とゆると七の撃手てハ泣恨
 ちらら瘦き身を顧るは汝女を我夫小見らるも今更面せ也不遇で
 逢う真清鏡移り時刻の九は再奉れ子小くは時の報れ恨や我を
 ろしかを惜子が添乳枕の夜小ゆる使はなくと何時迫り憂此半の挿守

ぞし撥投捨く位階なき監物先刻より心耳を清し聞居か不思議路
 涙を揮ひ下吏を呼よせ曰く思ひ言ひを此女と駕籠小乗我郎へ
 仔細く善いそを子にけりし命し扱用のま果しくと又館小より圖書
 小向く曰図の清治が妻何のなる年をせらるやと問圖書答く曰く
 彼者の夫清治小子が僕段内と申者を撃殺し刺し逮捕の者小多く疵
 付く何地共なき道逃れ依る女を人質とて入室を清治の所在を尋ん
 むの稱小供侍りと答ふ監物乾笑し今日彼女小大轂を轂せ聞小僧音の
 裏毎濁音笑小不知又紛明也都て人間小妄言を吐くも是小音有物
 と撃せ式掛せ聞時仔細者い濁音情者小音清く邪平明くとて言は
 聖代の舞樂をたさるや小音の清濁を聴分世の理乱臣下は忠女をぞ
 察せんぬ也依て聖代小禮樂なくんむかればか承る彼女既小狂し

人夏を不覺し雖も知否ハ轂の音小顯然きを今小省しけりしとて理を
 推し詰りしれむ圖書心不悦し雖も夏の原委を知らず己が悪意的の
 偏見を憂む曰く一旦彼女を餌小なく清治を釣寄令存せしむと
 枉氣を起し上ハ幕も放ちつらんと存せし処が身を免る角も卿の公は位
 久しと云ぬ監物さも有かんと笑を隠し程其外の訟を聴しそ自邸小
 内より道芝ハ宰相の苦を免る監物が郎小伴れらるが監物が室を
 夫小比し死に怨む婦人少く道芝小浴湯を携けらる衣服を改まを
 ると云ふも喜び酔ふハ見ゆるも尚狂乱するに金とれどもてつら
 折帝監物歸郎なりぬと早速道芝を監物が目下小居らぬ監物妻女及
 奴婢と遠避く道芝小向ひ謂く如何小女我ハ圖書が如き邪義とかり原
 罪今有太鼓を轂せ音聞に身の狂乱の何れを知圖書小はびく

救ひぬきま今心を安んじく原委を詰告たりと胎間を貫視し一語
 道芝潜然と涙を流し妻が心中を察す玉よ六何う包く侍らるも妻
 不ままを侍りし小毎端速兵小取圍らるる圖書全が郎小曳を侍りし小
 種々の呵責を見せまが行方自首せよと此糾問所詮陳するも不
 思ひ従丈夫伴狂業の如く牢に而已置り拷問せし妻常小宰府の天満宮
 を念し奉り度息了りて矣官神の内守護者相公頃日宿報主が同僚と
 しく奉り玉由をれ何卒拜謁もんと侍らるる甲斐有る新貴郎
 小伴を侍りしと狂伴狂と見せ奉りしと狐疑成女と憎く玉が以省させ
 玉の拜伏涙と俣詠へれを監物亦黙さしるも雁狂と成たり元来圖書
 が執悪の條々主君にも聞召を臣とせし時々烈明せよとの命をれを汝を省
 けらるる私の憐意をゆと皆國君の恩澤をなほ敢て忘却せぬと

毎汝が夫清治何地小定とる心憂を不知と送るも以處所も何如何
 ざると言語未だ終らざる庭前の榎籬の下もを行方存知者是より
 侍りて遠出も虫様の賣飼公病假眉假髻挿揮ひ玉小是清治猛秀なり
 道芝ハ欲心悲思も監物が心小耻俛首て言不發清治ハ頭を土に摺付
 今日途中より相公の仁慈を世に窮妻再度天目と拜支を護りしと
 美つと賢意も不顧後門を潜入之疾是侍りし相公の仁命と承りし
 感涙肝小深侍りしと拜謝と監物を清治がると知ると雖も侍りし
 不省醉小をくし曰卿ハ此女れ知音の者があう渠が夫清治ハ圖書下吏
 と較せ殺せし一個の罪人きま今や何を此辺を非れ田せで虜て罪を糾け
 びり左がくハ政道ハ私官司の過失が然るも婦女を餌小釣よせんか人の
 小兒懼ハ我不好仍と卿小此女を得たりなり彼清治ハ追て擗擗時亦有人

若由清治小面會やうぢいせうめんかいを必此領地を裝回まはらひする支勿さしつかを云いひ聞きんんなり早はやとく
とくと遠とほざと清治夫婦ハ残方のこりかたなり死し鳩恩きうおんを拜謝らいせしし急いそがらく後門ごもん
トととくとと出簿暮的しゅぼくぼくを幸あはひ小隱家せういんけへ落行おちゆ了り

南里亭其樂作

復雙言譽通矢全七冊

東南西北雲画

鬼卯作

夕霧書替文章全五冊

北雲画

新篇女水滸傳卷之三終

此中の大意北条泰時の家臣越路丹次郎三浦家の長
多田雷八兵衛の争論より丹次郎の横死より
震をり成長し相根山を抜き雷八を討
つ事大矢敷を射つるに天下を返す一巻と
始末面白く女敵も繪入を本あり

此中の大意夜を伊左衛門信室の楊梅小橋井家おは
梅井五郎と進め娘花の井と初よりつれははれぬ
若五郎が奸悪謀計よりおの井と梅原小舟と沈む事
と名を始末若五郎と梅原小舟と梅井の女水滸八
お付く事面白く面白くおつる縁入を本あり

